

## 富貴寺大堂壁画調査概要

美術工芸研究室

藤原時代のモニュメントとして著名な、大分県国東半島の富貴大堂の壁画については、すでに完備した調査報告も刊行されているが、<sup>(註1)</sup>1969年度のわれわれの調査においても、なお補足すべき二、三の知見と資料をうる事ができたので、その概要を報告する。

一つは、内陣小壁の描法に関するものである。小壁には東・西面12体、南・北面13体づつ計50軀の坐像の如来を描いているが、50軀の像は、たとえば衣や蓮弁を朱と墨の描線で描きわけた、2種の色彩構成を以て交互させ、同図容のくりかえしの中で、多彩な印象をつくるように留意している（口絵）。その像は、まさに型でおしたように、総高85cmの法量と形態を等しくしているのだが、われわれの観察では、四壁各面の数体において、如来形の体軀、頭光、蓮華座に、やや鈍く凹状をなす約60mm幅の線条の存在を認めることができた。その線条は、彩色剝落後の、いわゆる絵具やけの輪郭と一致し、型による下絵の線であることが十分に推察された。とくに北壁の中央部3体においては、この下絵線が、輪郭のみならず、眉目、衣褶線にも施されている。したがって、ここで使用された型は、単に輪郭だけを描く平板な下絵の型ではなく、細部を描いた絵様をなすものであり、推測を加えるならば、捻紙的なものの使用があつたと想像することはできる。捻紙の使

用は、すでに法隆寺金堂・五重塔の壁画について、同一図形の使用と壁面にみえる切こみ線の残存とから推測されている。但しそれは漆喰壁の場合である。板壁絵では顕著な例をみないが、凹線状をなす下絵線は、例えば室生寺金堂にみられ、醍醐寺五重塔にもその存在が報告され、とくに後者では焼筆の使用が推測されているが、<sup>(註2)</sup>図形の完成度は低い。図形の完成された捻紙下絵の作例としては、建暦二年(1122)以前の制作である旧淨瑠璃寺吉祥天厨子扉絵があげられる。一方、同一図形の反復という点では、正倉院中倉の造花様(版画宝相華文図)が想起される。それは、多数の同一図形をくりかえす支輪板装飾において、捻紙の下絵となりうることは想像されることである。このようにみてくると、図としても完成度の高い内陣小壁の下絵の場合は、板絵の下絵技法を考える上で、きわめて示唆に富む作例といえる。

第二は、来迎壁のX線透視撮影にもとづく知見である。ソフテックスE形使用、15KV・9MA・30sec・距離86cm・板厚29mm・フジXフィルム。来迎壁は全面にわたり、顔料の剝落がみられるが、白土下塗の上に、朱・緑・白・金箔などの顔料が残っている個処もある。そのうち、矢筈に短い板面の上より第5板、左右両端の、五菩薩が合掌して坐る重層の樓閣では、柱・長押・椀に朱と思われる赤色顔料、

楼の勾欄に白色顔料をとどめている（第1図A）。その白色顔料は、下塗の白土と比して、やや緻密で光沢をもっているが、はたしてX線撮影の結果は、下塗の白土とことなりX線を吸収している。X線写真で勾欄の部分が黒くみえるのがそれである（第1図B）。この白色顔料が鉛白であることは、十分に考えられる。板壁絵に使用された鉛白は、例えば醍醐寺五重塔の例もあげられ、ないわけではないが、富貴寺の

第1図A 富貴大堂後壁部分

ように山間の小堂で、画態も比較的簡素な壁面に使用されている点は注目しておいてよいことであろう。

第三は、外陣北面小壁に関する資料である。外陣の長押上小壁は、北面では180cmの長さをもつが、東・西・南面がいまも全面の板面をとどめているのたいし北面については現在の堂にはわずかに212cm長の中尊の部分のこのすのみで、余は新材で補っている。北壁には四

第1図B A図X線写真

第2図A 外陣小壁断片

第2図B A図部分

方四仏のうち、北方弥勒仏と諸眷属を描くと推定されているが、堂に現存するもの他には、松永家所蔵の約1m半程の北壁東端にあつたと想像される断片が報告されているのにすぎない。<sup>(註4)</sup> 全体の凡そ半分は、欠失の状態にある

わけである。今度、われわれが接しえたのは、上辺167.5・下辺169.0cm、幅は向右端21・左端88cmの、やや不整形な、全体の1/4弱に当る部分で、豊後高田市の某旧家に所蔵されているものである(第2図A)。板面の3/8は、処々に白土地を残すほかは、顔料もほとんど剝落しアラビヤ数字の落書がみえる現状である。しかも残された向右端の部分にもかなりの汚損があり、一軀の立像をのぞいては像容ははつきりしない。その点、図像学的に若干の問題をのこす、北壁の解明に直接的には資しえないのは遺憾である。立像は婦女像で、鱗袖のその姿態は、松永家蔵のそれと類似している。画風もまた、堂に現存の板面、松永家蔵の断片と同一とみてよい(第2図B)。板面の端の朽損をみるとおそらく北面西端の部をしめた部材と想像される。

以上のような所見は、制作の実年代や構想など、なお明きらかでない諸点の解決に、直接的に資するものではないが、画技上の知見は制作の背景について、若干示唆する処もある。後壁に簡単な矢筈矧ぎの構造をとり、板絵全体の白土下地を施すのみであり、とくに外陣東西壁は比較的簡略な画風をみるにもかかわらず、四天柱や外陣南壁に仏画の伝統的描法を見、前述のように後壁に鉛白を使用し、内陣小壁には捻紙の使用を予想させるような型描ぎの技法なども用いている。そうした点、天台六郷満山の活動を考慮にいと、この壁画の制作について専門的絵仏師の存在を想像することは、可能であろう。

(平田 寛)

附記 この調査については、福岡ユネスコ協会、九州大学文学部より多くの支援をうけることができた。(17頁へ続く)